北大生・宮澤弘幸「スパイ冤罪事件」の真相を広める会　http://miyazawa-lane.com/

事務局たより

第 29 号　2019 年 1 月 1 日　chyda-kr@f8.dion.ne.jp
◇事務局　101-0061 千代田区神田三崎町 2-19-8　杉山ビル 2F
千代田区労協気付　T:03-3264-2905 F:03-6272-5263

総がかり行動、断固継続

12 月 19 日、国会議員会館前行動には、2800 人が結集した

昨年末、藝大の「芸術と憲法を考える連続講座」で DVD「レーン・宮澤事件　もう一つの 12 月 8 日」を見た。何度も見たが、最後のシーンに改めて慄然とした。

防衛大学生が行進するカラー映像と 1943 年 10 月 21 日の明治神宮外苑競技場でぬかるみの中を行使する出陣学徒の分列行進のモノクロ映像が重なる中、「いま日本は大きな曲がり角にきている」との文字が浮かび上がる。この DVD が制作されたのは 1993 年。「曲がり角」に立ち続けて 25 年が経過したいま、空母を持ち今後５年間で 27 兆 4700 億円となる「防衛計画の大綱」が現出した。

秘密保護法（2013）集団的自衛権行使閣議決定(2014)戦争法（2015）共謀罪法(2017)と弾圧体制も強行された。曲がり角どころではない。中国・北朝鮮の脅威を声高に煽り正当化しようとする安倍政権は、間違いなく〝かつて辿った道〟へ国民を引きずり込もうとしている。

だが、昨年 6 月 23 日、沖縄慰霊の日。中学生・相良倫子さんは「もう二度と過去を未来にしないこと」と澄んだ声で宣言した。沖縄県民は玉城デニー知事を闘い取った。

2019 年、「あきらめない！」を再確認し、安倍政権打倒へと、さらに声を上げ、行動を続けたい。　（福島　清）

宮澤弘幸　顕彰・追悼墓参ご案内

２月２２日は、宮澤弘幸の命日、七十三回忌です。再び国民を〝戦争への道〟へと引きずり込もうとしている安倍政権の暴走を阻止する決意を新たにしましょう。

２月２２日（金）午後１時～２時　新宿・常圓寺

＊真相を広める会事務局員が、のぼりを持って待機し、ご案内します。

****

「宮澤・レーン事件から学ぶ集まり」

主宰者:
北大・戦後世代をつなぐ卒業生の会

毎年宮澤弘幸さんの命日に、菩提寺・西新宿常圓寺に集まり集いをしています。自由が冤罪で奪われた事件の事実と背景を学び、「自由と平和」を求め続ける運動だということを話し合いましょう。
お誘いあわせの上ぜひご参加ください。

▼とき　２月 22 日（木）１３：３０～
▼会場／新宿・常圓寺祖師堂地下ホール（新宿区西新宿 7-12-5　Tel 03-3371-1797）
＜講演会の部＞　13 時 30 分より　　参加費 1000 円
（１）荻野富士夫氏（元小樽商大教授）
日本近代史著書に「特高警察」「思想検事」等人権・自由侵害に関する著書多い）
（２）ＤＶＤ上映「レーン・宮澤事件　もうひとつの 12 月 8 日」（予定）
（３）出席者有志発言
＜懇親情報交流会＞　会費 3000 円　同会場で

問い合わせ　村瀬 090-4947-5393、泉 090-4534-1375、向山 090-4675-5483

東京藝大「芸術と憲法を考える連続講座」 第 12 回

山と語学を愛した大学生はなぜ逮捕され命を奪われねばならなかったのか？

「自由と平和のための東京藝術大学有志の会」主催の「芸術と憲法を考える連続講座・第 12 回」は、「山と語学を愛した大学生はなぜ逮捕され命を奪われねばならなかったのか？」のテーマで、12 月６日、上野キャンパス内教室で開催され、芸大学生らを含む約 160 人が参加して行われた。

DVD「レーン・宮澤事件　もうひとつの 12 月 8 日」を見た後、山野井孝有・本会元代表に、川嶋均さん（東京藝大非常勤講師・「有志の会」代表）が質問する形で進行。山野井さんは、宮澤さんがスパイ冤罪事件で弾圧されたことを知った経過から、現在もなお「スパイの妹」としてアメリカに住む秋間美江子さんが抱いている苦しみを紹介した。最後に山田健太さん（専修大学教授）は「かつてはメディアと市民とが連帯していた。しかし 2000 年代になって、メディアと市民が敵対する事態になっている。だがメディアと市民が真に連帯すれば事態を変えることができる」と警鐘を鳴らし、今後の課題を提起した。

主催者の川嶋さんは、東京藝大学生を含むこの事件を知らない人を前提に、詳細な資料と写真などをスライドにして説明した。ともすれば風化する弾圧事件に対して、被害者が学生であったことに注目して、こうした講座を開催した視点と努力を讃えたいと思う。

（福島　清）

反原発官邸前行動に参加しながら思う

伊藤　陽一（法政大学名誉教授）

■反原発コールと国会審議の空洞化

「原発なくても電気は足りてる」、「地震の国に原発いらない」、「すべての原発再稼働反対」、「大間原発建設反対」、「老朽原発もう動かすな」、「東海第二再稼働反対」、「原発やめて被災者守れ」、「原発やめてふるさと返せ」、「原発売るな、どこにも売るな」、「原発輸出はもうアキラメロ」、「すべての原発直ちに廃炉」、「核燃サイクルもうあきらめろ」、「小型原発開発反対」、「再生エネで原発ゼロに」……。

毎週金曜日夜、ぐみ(茱萸)坂の首相官邸前と歩道、国会正門前の反原発抗議集会、斜め向いの「希望のエリア」でのコールである。

安倍政治の下では、戦争法「強行」成立をはじめ、国会での野党の質疑時間を制限し、関係資料があるのに無いといい、資料が「発見」されても公開せず議員に筆写させ、捏造・偽造が横行している。具体的内容を示さない「法案」を成立させて、内容は内閣・関係省庁が後に定める、という。国会で「ご飯論法」でまともには答弁しない。

民主主義の基本をなす三権のうちの「立法」府の機能制限・空洞化である。従来ありえなかった事態が進み、憲法改悪が狙われている。

■危険な原発への膨大な国費の投入・浪費にストップを―原発ゼロを

これと並行して、エネルギーでの原発固執が継続している。今や、日本の政策は世界に比べて「周回遅れ」になり、この分野の革新がサボられ、何兆、何十兆円という巨額の国費が空しく浪費されている。原発ゼロが望ましいことは、今や多くの国民に明らかになっている。

●原発が無くても電気は足りている。●地震・火山等自然災害が多発する地理・地層を持つ日本での原発稼働は危険である。●原発システムの安全は電力会社も原子力規制委員会も保証できない。●「安全神話」を流布・宣伝されて福島事故が起きた。東電幹部や原発推進者たちは自分に責任はなかったという。そして再び「安全神話」が学校教科書他で広められている。

●原発建設から稼働、そして廃炉に至る過程全体のコストは巨額極まりない。●安倍首相は原発輸出を成長戦略の１つにしたが、危険とコスト高で失敗・総崩れ状態だ。●東電福島事故と放射線物質の散布による経済社会・国民生活への打撃、特に被災住民・労働者の精神的・身体的・経済的労苦は果てしない。しかも補償が不十分な中、東京オリンピックでの「復興」宣伝をめざし被災者・被害者の「切り捨て」を進めている。

●環境-山林・住宅地、河川、海洋、動植物の汚染も限りない。●使用済み核燃料、プルトニウム、高濃度核汚染廃棄物、除染廃棄物等の中間・最終処分は未解決のままだ。万年、数十万年かかる大作業である。●原発をストップさせても、自然(再生)エネルギーで十分代替・転換できること、コスト低下になることは、世界と日本の現実の動向が明らかにしている。

●原発推進勢力は原発をベースにおいて、自然エネルギーの拡大を抑制・妨害している。●危険で、将来的に展望のない原発をゼロにすべきである。●ごく少数の原発推進勢力（政府・電力会社・原発メーカー・原発関連「有識者」）は、自らの狭い利益に固執して、日本をエネルギー後進国に陥れている。

●与党は、原発推進の是非に関する国会での論議を避けようとして、野党４党と無所属の会が 2018 年３月９日に提出した「原発廃止・エネルギー転換を実現するための改革基本法案」（略称：原発ゼロ法案）に関する委員会開催に応じていない。

（４面へつづく）

夜空の下、ライトでアピール（12 月 14 日）

12 月 28 日の今年最後の金曜日行動には、350 人が結集し、官邸前と国会議事堂前で「原発いらない」と訴えた。（4，5面の写真も同じ）

（３面からつづく）

●原発ゼロ法案は前文でいう。「……原発廃止・エネルギー転換の実現は、未来への希望である。原発廃止・エネルギー転換を実現することにより、環境と調和のとれた新しい経済社会を創造するとともに、そのために創出される新技術を通じて原子力発電所のない世界の実現に貢献することができる。さらに、原発廃止・エネルギー転換の実現による脱炭素化の促進は、地球規模の緊要な課題である気候変動の問題の解決に資するものとなる」

■首都圏反原発連合（反原連）の官邸前抗議の継続を願って

毎金曜夜の官邸前行動を主催している反原連によれば、2017 年、金曜日行動の人数減と運営費不足に対応して、献金募集キャンペーンをしたところ、4 か月間で 1000 万円の献金があり 2019 年いっぱい、あるいは 2020 年 3 月までは現在の形態を継続することにした。

2020 年 4 月以降について、継続、縮小、停止の検討に入るので、18 年 11 月末締め切りでアンケートを募ったという。12 月に反原連のサイトには、386 人からの解答があったこと、これらを考慮しながら 2019 年 1 月を目途に、方針を考える旨が掲示されている。

私は、大学の経済学部ゼミの同期の友人と 2 人で 2012 年の日比谷野音での反原発集会に参加して、同じゼミの６期下と 9 期下の 2 人と出会い、以後 4 人グループで、官邸前抗議や様々の国会正門前・議員会館前・日比谷野音・代々木公園等の集会に参加してきた。官邸前抗議では 12 月 28 日の主催者 320 回目に、グループの誰かの参加は 293 回目、私個人は、224 回目（その他八王子に 10 回、道庁横に 2 回）を数えている。

反原連のアンケートに際して、官邸前抗議の意義を以下のように記し提出した。

①官邸前あるいは国会議事堂周囲に、市民・労働者による抗議と自由な発言の空間を作った。反原連の行動が弱まると、都の迷惑条例の発動等が危ぶまれる。

②官邸・議員会館の議員・秘書たちに、市民たちは勝つまで、少人数になっても、抗議し続ける姿勢を示し続けて、悪法の採択・施行を許さず、反・脱原発の議員たちを激励している。

③毎週の官邸前抗議は、日本と世界の反原発・脱原発の「聖地」の意味を持つ。

⑴コールの内容が、全国および他国の反原発をアピールしている。

⑵毎金曜日夜の抗議行動は、例えば八王子（金八デモ）や北海道庁横など全国各地で行われて、また月 1

回等の行動もある。官邸前抗議は、これら全国の運動と相互に連携し、激励しあい心の拠りどころにもなっている。

⑶全国の原発関連地域の活動者・住民、福島の住民・避難者が現状や意見をアピールする場になっている。

⑷関係・関心を持つ他国の反原発市民が、来日して気軽に参加し意見を語れる場である。

⑸経産省、規制委員会、東電、原電前や再稼働や建設現場等での抗議活動や、代々木公園・日比谷野音、国会正門前集会、そして裁判闘争がともに重要であるが、官邸前・国会正門前抗議が継続されていることで、反原発運動の強さを世の中に示すことになる。官邸前抗議の継続を欠いてしまうと諸抗議行動が弱く映りかねない。

④規制委員会と特に司法の堕落で、再稼働原発数が増え、原発推進勢力による「再・安全神話」宣伝はますます強化されている。しかし、国民・市民は、電力不足・安全神話・コスト安・クリーンなどのデマを見破り、再生エネの推奨・育成を当然視するようになった。反・脱原発運動が手をぬかない限り、この世論は変わらず拡大するだろう。この世論形成の一角を反原連の熱心で執拗な官邸前抗議活動が担ってきたと自負するべきである。

人数が少なくなっても、しつこく抗議行動を継続しよう。沖縄にならって勝つまで継続しよう。大義は反・脱原発にある。毎週継続してきたこの行動は、反・脱原発運動の中でも、そして市民の抵抗運動としても、世界的にそして日本でも特筆されるものなのだ。

アンケートに答えた後に、さらに以下をつけ加えたいと考えた。『②⑹退庁する国家公務員や訪問者、そして必ず通過する観光バスのお客さんへアピールしている。観光バスからは手を振って返してくれる人がいる。⑥反原連は、2020 年 3 月までは現在の抗議形態を続けることが可能だと書いている。それなら 2020 年東京オリンピック時に、外国からのお客さんに対して、安倍首相によるオリンピック招請時の “under control” のウソ、「福島復興」の欺瞞をあばき、2 度の原爆投下と重大原発事故を経験した日本の市民は「世界のどこにも原発いらない」と考えていることをアピールすることにしてはどうか。』

もとより、主催者の官邸前と国会正門前の 2 カ所での設営（警視庁への毎回の届け出、舞台・マイク・拡声器・幟等の設営、警備（自己規制・反対団体からの危害の危険）・医療、文書配布・献金受付け）等々、寒さ、雨、酷暑の中で反原連のスタッフの職場後のご苦労は大変だし、オリンピック開催にかけて圧力は増すだろう。

「希望のエリア」の毎金曜の集会は 2018 年 12 月 28 日に終了した。この集会には多くの人が参加し多くの感謝が語られていた。反原連にもこれまでの活動の継続を感謝しなければならない。

私たち 4 人グループも 7 年を経て、60～70 歳がから 70～80 歳初めになり、常時 4 人参加は厳しくなった。しかし、私は、少なくとも東京オリンピック開催時に、そして原発ゼロ法案が国会で真摯に論議されて原発ゼロへの手がかりが見通されるまで、この反原連がこの抗議活動を継続することを期待し、できるだけの参加をめざしたいと考えている。

寒風吹く今年最後の 12 月 28 日金曜日行動。伊藤陽一さん（左）と千代田区労協代表として参加した水久保文明さん

本書発行の目的は、本書名にすべて顕れ、込められている。99 歳の日々を老人施設に暮らすノブさんは、著者の聞き取りに「戦争はしてはいけません―テレビを見ていると、今も外国では戦争をしています。ああ、何と言ったらいいのか……戦争は絶対にしてはいけません」と答え、締めくくっている。静かで、しかし已むに已まれぬ現状への不安が込められている。読む者は、このいのちの訴えにしっかりと応え、決して、このまま遺言にさせてはならない。

構成は、聞き取りに応じて、子供心にナイチンゲールに共感し戦場の看護婦になろうと決心した生立ち、理想を打ち砕く戦場看護の悲惨な現場、そして戦後の苦難までをまとめた前半と、ノブさんの現場証言に触発された著者が、従軍看護婦問題の全体像にまで目を広げ、埋もれた真実の掘起こしに努めた後半の二本立てになっている。

正直言って、読むのはきつい。傷病看護というよりは、死とまみれ、死後を処置する修羅、さらには従軍看護婦が従軍慰安婦にされ、従軍慰安婦が従軍看護婦にされる非条理、そして生死の戦場にあってなお存在する差別の理不尽。息を止め、目を開き直して読む覚悟が迫られる。

もの知らずして、「陸軍看護婦」という存在を初めて知った。日赤（日本赤十字社）の看護婦を対象とした従軍看護婦は知られているが、これとは別に陸軍が直接、個々の看護婦を引き込んで戦場の病院に配置していた。日赤看護婦を日看、軍直接を陸看と呼んで分け、同じ病院内でも病棟ごとに分け、仕事も待遇も分けていた。本書によると陸看に関する一切の公文書・記録が敗戦と共に破棄されているが、現場感覚では明らかに日看上位の格差があり、陸看はどさくさ紛れに数だけ揃え、消耗品の如く酷使されるの感があった。なにやら現代のなんとか法案の源流を見る思いがする。

重ねてノブさん、こうも言う。「戦争は二度としてはいけない。本当に何と言っていいか。人と人は国が違っても争いはない。国と国が戦争をするから大変な悲惨になる」――同じ言、たしか宮澤・レーン冤罪事件でも聞いた。普遍の警句として心しなければならない。

＝自費出版　2018・12・10 刊

（おおすみひろんど）

＜コラム＞　冤罪忘れるな！㉙

火を点けた手紙の主

宮澤弘幸の義弟・秋間浩

手紙は、問うた。なぜ宮澤だったのか？なぜ懲役 15 年だったのか？罠に嵌めたのは誰で何のため？――要約すれば、この３点が手紙の受け手・上田誠吉弁護士の潜在意欲に火を点けた。冤罪の標的選び、重罰の狙い、冤罪の動機と犯益。これは冤罪掘起こしの原点であると同時に、冤罪の本質を衝いている。結果からみても冤罪告発運動に欠かせない人、手紙だった。

ビデオ「レーン・宮澤事件　もうひとつの12月8日」から

秋間は、1925 年東京の生れ、47 年に旧制帝大時代の東大工学部を卒業し、文部省・郵政省での研究職を経て渡米、国境を超える研究者としての生涯を送っている。この間、縁あって宮澤弘幸の実妹と結婚、冤罪被害の苛酷を知るに及び、広く深く知ってもらうことによって「真の世界平和」に導く志を強くした。秋間の問うた３点は、いまなお完全に解明されたとは言えない。平和に生きる命の炎となって厳存している。

◆　◆　◆

「スパイ冤罪事件」の真相に迫る決定版（本会編）

『引き裂かれた青春―戦争と国家秘密』花伝社刊

第１部＝冤罪の真相　　第２部＝冤罪事実の条条検証
資料編＝判決全文、軍機保護法全文、年表
特別添付＝重要事項索引

申し込みは本会事務局までＦＡＸ・メールで（１面上部題字横に掲載）。送料税込み 2300 円。後払い。

【事務局から】亥年の今年は、暗黒時代に戻りかねない危険水域を越えようとしています。それは安倍改憲です。現在とは「過ぎ去った過去と来るべき未来の接点」を言います。その「現在」に生きる私たちは、未来の人たちへ「過った歴史を繰り返させてはならない」という大きな責任を負っています。青臭い高校生の頃、「戦争で殺されるより、戦争反対の運動で死にたい」と真剣に考えていました。それは今なお、私の思想となっています◆統一地方選挙と参議院選挙、いや、ダブル選挙が行われるかもしれない今年。沖縄県民の「諦めない」精神に学び、たたかい続けたい、そんな思いを強くしています。　（水久保文明）